

世に満ちる奇妙不可思議を愛好し、健康指標から眼を反らして旧型酒に酔っぱらう、ろくでなし達が集まる店。バー・オールドアダム。秘封倶楽部の活動の一環で訪れて以来、すっかり常連になってしまったその店で、私達はささやかな週末の一時を楽しんでいた。

「乾杯ー!」

「かんぱーい」

開けたばかりのフォビドゥンサイダーのグラスを重ね、くいと傾ければ喉に弾ける禁忌の炭酸。冷えた旧型^{オールド}なアルコールの野趣な味わいに思わず頬も綻ぶ。

専任の教授が課した面倒くさい課題を研究室の机に叩き込み、やっと迎えた週末。気分も踊ろうというものだ。しゅわしゅわと弾ける炭酸に包まれ、解放感がグラスの上に溢れ出す。

「二週間ぶりのお酒はたまらないわねえ。やっぱりこういう時は旧型酒に限るわ」

「蓮子ももっと計画的だったら、ここまで追い詰められる事もなかったと思うんだけど」

「あはは、でもそれじゃこの解放感も味わえなかったわよ。Dr. レイテンシー?」

「詭弁ねえ……」

口を尖らせる相棒に、ね？ とウインクひとつ。早速空になったグラスに、メリー、自分の順でサイダーを注ぐ。禁断の知恵がもたらすアルコールは、塩と油分の塊みたいなフィッシュアンドチップスと相性抜群だ。読めない文字を印刷された包み紙の新聞に指先を拭う。

「それでね、次の本の話なんだけど」

「あら、蓮子にはもう何かプランがあるの？」

今日の話題は、燕石博物誌の続刊となる予定の同人誌だ。オールドアダムの常連たちを通じて新しく得た不思議の糸口は、私達に新しい不思議との遭遇を与えてくれた。それをまとめて次の本にしようという計画である。幸い、燕石博物誌はそこそこ好評で、頒布時にも知り合いになったサークルと一緒に次のイベントにも参加を決めてある。

「ちよつと試してみたい装丁もあるのよ。今度は私も何か書いてみようかなって」

「今度は蓮子もペンネームを考えないといけないわね」

既に頭の中にはいくつかプロットもできている。課題とかで追い詰められている時は、まったくこういうアイディアばかり浮かぶものなのだ。

テーブルの上にタブレットを広げ、新しいサイダーの瓶と一緒にまだ見ぬ新刊にあれこれと想像を巡らせていた時。

カラン、と入口のベルが鳴る。珍しい。この時間にはあまり来客もないはずなのに。

3 オールドアダムパラドックス

ふと、メリーの肩越しにそちらを見上げた私は、そのままの姿勢でしばし絶句。

「どうしたの？ 蓮……」

間拔けな私の顔を覗き込んで、背後を振り返ったメリーも目を丸くする。

滅多に新顔の現れないオールドアダムでは、だいたいの来客は顔見知りだ。5回も来店すればだいたいの常連の顔は覚えてしまう。けれど、今日入り口をくぐってやってきたのは、あまりにも予想外で、実に見覚えのある二人組であったからだ。

「な、なにこれ!？」

「……どうということ？」

黒い帽子にケープ、ブラウスにスカートの宇佐見蓮子。金髪にモブキャップ、紫のブラウスのマエリベリー・ハーン。

そしてまた、なんともややこしい事に。

やってきたあちらの秘封倶楽部ふたりも、私達を見て驚きの声を上げていた。

▼ 2007/10/28 21:48 先斗町通三条下ル無花果町 バー・オールドアダム?

それから一時間あまりが過ぎて。

オールドアダムには、実に理解しがたい光景が広がっていた。

「これは……なんとも」

秘封倶楽部は曲がりなりにもオカルトサークルである。それも結界の隙間を探し境界を暴く、非合法な活動も辞さない不良サークルだ。これまでだつてそれなりに成果を上げ、人には言えない不思議な体験をしてきた。蓮台野に咲く満開の夜桜、異世界の竹林を彷徨い遭遇した炎の化け物。L4ラグランジュポイントに眠る、原始の緑に覆われたトリフネ遺跡。

けれど。

馴染みになったバーに、自分達とそっくりな二人組が次々と、山のように押し掛けて、無数の秘封倶楽部と顔を突き合わせるなんて体験、流石に想定外も想定外。いくらなんでも非日常が過ぎるという話であつた。

「壮観ねえ」

頭を抱える私の隣で、なんとも能天気な感想を漏らすメリー。

[illegible]

ざっと見渡す視界の中にだけでも、同じ顔がそれぞれ数百。それぞれが連れ立つ相手と顔を突き合わせ、周りを見回しながら様子をうかがい、囁き交わしている。きっとその総数は百万よりもなお多い。

「いつの間にこんなに増えたのかしら、私達」

「……課題をやった間なのは確かね」

もしかして旧型酒の悪酔いだろうか、空っぽのフオビドウンサイダーの瓶を覗きこんでみたりもしたが、キラキラ輝くガラスの向こうには、やっぱり見知った顔、顔、顔。

ほたりとほつぺに落ちてきた冷たい雫を拭って吐息する。

「私達の他にも、こんなに秘封倶楽部って居たのね。下手したら京都の人口より多そうよ」

「なんとも穏やかじゃないわね……」

この京都に限っても、オカルトサークルなんてごまんとある。公式に届け出ている団体はその名前を調べる方法だつてあるけれど、私達のような不良オカルトサークルともなれば、その活動はアンダーグラウンドなものだ。

「でも蓮子？ 数が多いってことは、それだけ偶然被るってこともあると思うんだけど」

「それは否定しないけど、そっくりさんが居ていい理由にはならないと思うの」

「もっともな話ね」

ぐるりと店内を見回す。顔が映るくらいぴかぴかに良く磨き込まれたテーブル、歴史とアルコールと煙草が染みついたカウンター、萎れかけたままの観葉植物、演出なのかマスターのズボラなのか色褪せたメニュー、音の飛びがちな骨董品のジュークボックス。

内装の一つ一つはどれも見覚えのあるオールドアダムの調度だが、じっと眺めていくとそのフロアがいつの間にか、数キロ先まで続いているのだ。

見慣れた光景ばかりで構成された知らない場所という奇妙な視界に、頭がくらくらする。

メリーに確認したところ、ここはもう境界をくぐり抜けた先だという。しかしいつ境界を抜けたのかは、メリーにも覚えがないらしかった。一番怪しいのは入り口のドアだが、そもそも冷静に考えて、オールドアダムはこんなに大勢が詰めかけられるような店ではないのだ。

「ともあれ、こうして呆けてたって始まらないわね」

まずは行動。私は席を立て、手近な人影に声をかけた。と言ってもこの部屋の中に存在するのはメリーか蓮子の2種類のみであり、私の相手たるメリーはこうしてすぐ側にいるわけで、そちらを選ぶのはなんとなく憚られた。

必然的に、呼び止められたのはもう一人の私……宇佐見蓮子となる。

「ねえ、貴方」

「なに？」

振り向き、帽子の下から物怖じせず真っ直ぐにこちらを見つめる瞳。何の変哲もない黒い目は、けれど強い意志を宿し、じっと見ているとまるで吸い込まれてしまいそうな錯覚を覚える。毎日鏡の向こうによく見る美少女であるが、こうやって鏡像じゃない自分が動いて喋るってのはなんともすごい違和感だ。

「あなたの名前、聞いてもいいかしら」

「……もうこれで17回目よ」

うんざりとした顔で、向こうの私——蓮子βはこめかみをつつき、

「私は宇佐見蓮子。専攻は超統一物理学。オカルトサークル秘封倶楽部のメンバーよ」

「奇遇ねえ。私も宇佐見蓮子なのよ」

「でしょうね」

さすが私、既に状況はしつかり把握済みのようだ。

髪長さとか、着ている服とか。よく見ればそれぞれに小さな差はあるけれど、基本的にとても良く似た私だった。蓮子βは、ついとこちらの隣へと視線を向け、胡乱げに目を細める。

「で、そちらがあなたの相棒？」

「ええ。奇遇ね。あなたと同じく、私の相棒もメリーなのよ」

「はじめまして……でいいのかしら？」

「はじめまして、でいいんじゃないかしら」

小首を傾げた後、そつと自己紹介をするメリーとメリーβ。なんとも暢気な様子で親交を深めている二人を尻目に、蓮子βは吐息をひとつ挟み、私のテーブルへと腰を下ろす。

「あなたも私なんだから、だいたいことは予想できてると思うけど。一応分かっていることを教えておくわ。ここはおそらく、境界の向こうに作られた、もうひとつの旧約酒場^{オールドアダム}。広さはおおよそ無限大。……少なくとも、私達の誰も部屋の端っこを見つけられてないわ。マスターもいないし他のお客さんもない。当然ながら他の出口もない。ドアも窓も開かないわ。脱出手段は今のところ皆目見当つかず」

「これはどうもご親切に。感謝するわ、私」

「あなたも私なんだから、そのうち同じことを考えるし同じことに気付くのよ。ここで意地悪したところで一緒なもの」

なるほど。私が考えるような事は、他の私達も考え付いているということか。早速意気投合した様子のメリーさんとメリーβを眺めつつ、私は唇に指を触れさせた。

「ねえ、蓮子β」

「私から見ればあなたがβなんだけど」

なるほど。ここで『βって何よう』みたいな事を言い出さないところ、本当に私なんだなあ。

「……まあそこは主観で許してちょうだい。一つ確認したいんだけど。ここに集められてるのは秘封倶楽部だけってことでいいのよね？」

返事は目の前からではなく、隣からやってきた。

「ああ。その通りだよ」

「うげ」

思わず揃ってそちらに眼を向け、私達が一斉に唸ってしまったのは、決して大袈裟な反応ではなかったはずだ。

▼ 2067/10/28 21:57 ♪♪♪♪♪♪♪♪ バー・オールドアダム♪

自分そっくりの顔をした異性。そいつを前にした瞬間の実に筆舌に尽くしがたい感覚を、ぜひご想像いただきたい。自分じゃない自分が親しげにそこに存在するという光景は、悪夢といふかなんというか。二人揃って顔をしかめた私達に、そいつもまた実に微妙な表情をしながら答えた。

「そんな顔をされるとこっちも困るんだよな。僕だって同じ気分なんだから。そっちの僕の想像の通り、ここは多分、秘封倶楽部の可能性が集められている場所だよ」

宇佐美蓮司なんだかと名乗った（だが断じて蓮子と呼ぶ）彼は、私が口にしようにしたことを先回りして説明した。頭の中を読まれてるみたいで気持ち悪いけど、これは向こうの私に読心能力があるわけじゃなく、やはりこんな外見でも私だから私と同じことを思いついているということなのだろう。

「大分、差異はあるみたいだけどね」

紹介するよと彼が呼び寄せるのは、やはりというかなんというか金髪的美青年のメリーだった。スラックスにブラウスの姿が、彼の世界の秘封倶楽部なのだろう。妙に距離が近いという

か、顔と顔が近いのが気になる。……が、突っ込むのはやめておいた。

「……わりとかっこいいわね」

「ちよっと、メリー？」

どうにも、メリーは他のメリーに対してやけに評価が高いというか警戒のハードルが高い気がする。同じ自分だからってそうも簡単に信用していいものか……というところまで思い至り、「そこを真面目に悩むと自己評価の問題に入り込むから、あまり真剣に考えない方がいいわ」

「……ご忠告どうも」

蓮子βからの言葉に頭を抱える。やりにくいなあもう。

改めて辺りを見回してみれば、ここに集まった私達は、皆それぞれに少しずつ違っていった。それは外見であったり、言動であったり、服装であったり、時に性別であったり年齢であったりと様々だったが、観察する限りその姿に全く同じものは見当たらない。

それでいて、宇佐見蓮子は宇佐見蓮子、マエリベリー・ハーンはマエリベリー・ハーンだとすぐに分かるのだ。そう思って視線を巡らせれば、

「えい」

「きゃあ!？」

「ちよっと、なにしてるの蓮子!？」

「いやあその。あっちのメリーさんがあまり見事だったもんでつい」

向こうの大テーブル、メリーσの大きなおっぱいに手を伸ばしてメリーδに怒られている蓮子δ。一緒になって怒る蓮子σもそれに加わり、まったくもって騒がしい。

「メリー、もうやだー、帰るー!」

「ほらほら、へソ曲げないの。こんなの滅多にない不思議体験じゃない」

「やだー! かえるのー!」

「もう、蓮子ったらわがままねえ。私が一緒でも嫌?」

メリーεの膝の上に抱えられ、ぐずる黒髪幼女こと蓮子ε。舌ったらずな甘い声の抗議を、どこ吹き風とあやすメリーεの表情はいまにも溶け落ちそうなアイスクリームみたいだ。

おでこをぐりぐりと寄せ合うメリーεに、蓮子εはむうと膨れながら、小さく首を横に振った。満面の笑顔のメリーεがぱしゃぱしゃと携帯のフラッシュを焚く。

「……いくらなんでもあれ、犯罪じゃないかしら」

「そもそも幼女をバーに連れてくるのが問題な気がするわ」

「そうかしら。可愛いじゃない? ねえ」

「ええ。蓮子もあれくらい素直だといいのにねえ」

眉をひそめる蓮子一同の統一見解に対し、メリーさん一同はこれに強く異議を唱える。しか

し蓮子は断固としてメリーの意見には反対である。

「やめて、近寄らないで！ もう放っておいてよ！」

益体もない思考の中に突然割り込んだヒステリックな声に、私達は思わず顔を上げた。続けて響く甲高い硝子の音。

「あなたが誰だって関係ないわ。それ以上近付かないで！」

叫んでいるのは向こうの私だ。激昂する自分の声なんて、外から聞いていると落ち着かないことこの上なかった。床の上、砕けたサイダーの瓶を取り巻くように、小さな人だかりができていた。

その中央に立つのは——車椅子に座るメリーを庇うようにして叫ぶ、蓮子と。

「オカルトも不思議ももうたくさんよ！ オールドアダムなんて二度と来なくなかった！ それなのに、どうして私達をこんな所に呼ぶのよ！」

悲痛な叫びを上げる蓮子と。車椅子に座るメリーとは、これに對して反応を見せない。彼女はいつものドレスを着てはいるものの、その手足は細り、落ち窪んだ眼窩を覆うように包帯が巻かれていた。濃い病の匂いが、つんと鼻を掠める。

「あまり近付かない方がいいわよ。あのメリーって、色んなものを見すぎて耐え切れずに、自分で目を潰しちゃったらしいから。……ああやって、不幸な私達もいるのね」

「……………」

隣の蓮子……メリーと揃いの指輪を薬指に付けた蓮子が、そっと私に耳打ちしてきた内容に、私は顔を顰める。じっと手を繋いで車椅子の秘封倶楽部を見つめる秘封倶楽部は、やりきれない憐憫の表情を浮かべていた。

ああ、私達にはこういう可能性だってあるのか。するともしかして、こうやってそれを見せつけることが、この異変を起こした誰かの目的ということなのだろうか？

「ああ、懐かしいわねえ。最近すっかりこんな事も無くなっちゃったから」

「そうね。昔は随分無茶をしたものねえ」

「久々の同窓会に、誰かが気を利かせてくれたのかしらね」

その向こうでは穏やかにテーブルを囲み、思ひ出話に花を咲かせる蓮子とメリー。こっちはどちらも素敵なおばさまといった気配で、そのやりとりはなんだかちよつとうらやましい。

「うちの子たちにも見習ってほしいわねえ」

「そうねえ、お互いインドア趣味で苦労するわね」

蓮子とメリーの話題は自分達の娘の話になり、彼女達が冒険を忘れた毎日を送っている事を嘆いていた。彼女達ももしかしたら秘封倶楽部なのだろうか。

あれが私達の未来かというときまた少し話は違ふんだろうけど。

「まあ、おおむね分かったわ。ここにいるのは私達の並行世界。可能性問題なのね」

無数の並行世界の秘封倶楽部のバリエーション。そのどれもが、秘封倶楽部の可能性ということだ。その中での共通項は、多分――

「日付無きバー・オールドアダム。^{デイトレス}時間の流れが意味をもたない世界。つまり、この旧約酒場が存在する世界線の秘封倶楽部が境界の中に重なり合わさってこんな状態が発生しているってことだね？」

「冴えてるわね。さすが私」

あまり同意したくない蓮子 γ に、さらりと同意する蓮子 β 。まあ彼の言っている事は確かに正しくて、ここに集められた私達は、この状況に困惑はしていても、この場所に困惑はしていない。それはつまり、この場の私達は全て、オールドアダムを知っているということだ。逆説的に、ここに集まった秘封倶楽部は、あらゆる可能性の中のほんの一部。

バー・オールドアダムの事なんか知りもしないで活動している私達は、ここに来る事はないのだろう。

「でも、偶然でこんなことが起こるものかしら？」

メリーがメリー δ （おっぱい大きい）と一緒に聞いてくる。ううむ。改めて見ても半端ないなメリー δ （おっぱい大きい）の可能性。……ところで、これだけ数のある私の可能性世界の

中に、たわわな宇佐見蓮子ちゃんの可能性が見当たらない件についても少し詳しく。

閑話休題

「要するに、誰かが意図的にこの状況を引き起こしてること？」

「そうじゃないと腑に落ちないことがあるわね。参考までに聞くけど、あなた達、これまでサークル活動でどんなことをしてきたの？」

「……？ 空の上の神社にお参りに行ったり、幻を吐く蛤を探しに干拓された干潟を歩いたり。月に行ってウサギに会ったりしたわ」

彼女たちの語る活動は、私達の記憶にあるものとは大きく違うものだった。試しに、蓮子 β と手分けして他の秘封倶楽部たちに同じことを訊ねてみるが、その活動内容はどれもこれも千差万別。積み木のお城を巡って、紙粘土細工の彫刻家と対決したメリー ε と蓮子 ε 、諏訪の海を訪れ、今世紀の始まりに消えてしまった神社の消息を探った蓮子 δ にメリー δ 。もう引退して長いという蓮子 θ とメリー θ も、若いころはオーストラリアの天文台で、アポロ計画の陰謀を暴いたり、ワイルドな冒険をしていたという。

そんな、千差万別の冒険を経験した百万通りの秘封倶楽部は、しかしこの旧約酒場という一つのキーワードで交錯している。あるいは、それを綴るDr. レイテンシーの名で。

「……成程ね。全くの偶然って可能性は捨てきれないけど。今の私達の交錯の原因になったの

がここなんじゃないかしら」

「……違うわ！ 私たちじゃない！」

叫んだのは車椅子のメリー。怯える彼女の手を握り、蓮子が声を張り上げる。しかしそれを取り囲む私達の声は冷ややかだ。

「どうして？ 境界が見えないメリーと一緒に、どうやって結界暴きをするの？」

「月と星を見なくなったあなたが、どうして宇佐見蓮子なの？」

彼女達が秘封倶楽部たりえない理由。それは私達を結び付けた異能の目を持たないからだ。彼女達は事故でそれを失った。ゆえに、ここに居る誰よりも異端である。

彼女達はオカルトを、それを求める秘封倶楽部を憎んでいた。

ならば、そんな異物は排除されねばならない。メリーを庇い叫ぶ蓮子。を無視し、無数の手が彼女達に伸びる――

「二人とも間違えよ」

それを制して私は叫ぶ。この目が、不思議な能力があるかないかなんて関係ない。それはきつかけで、大事な要素だけど、秘封倶楽部を続けることとは関係ないのだ。

「ここに私達が集められたのは、もっとほかの理由よ。見て！」

空を指差し叫ぶ私のその言葉に、一斉に周囲の私達が天を振り仰いだ。

「消去法ではないけれどね。私達がしようとして、できなかったことが一つだけあるの」
 オールドアダムの天井。本来なら古びた空調ファンが小さく軋みながら回るそこに、小さな
 天窓が開いていた。そこから覗く夜空の隅に、三日月に欠けた月が輝いている。

「私達が探していたのは、あそこ。――月よ」

月に行くこと。それは私達を含め、この場に溢れた無数の秘封倶楽部達の念願の一つである
 と言っている。事実、さっきの活動内容で何人かの私達は、これまでの活動を振り返る中で、
 一度は月に行ってみたいと口にし、また他の何人かは、月に行くために資金を集めたり、研究
 室を巡ったりしていた。

不思議な図書館に務めたり、夏休みじゅうずつと謎起きビルの管理をするバイトをしたり。
 そこまで妙なオカルトに遭遇したりもしたけれど。私達の日々の不思議の目指すその果てに
 は、38万4000キロ先の星があったのだ。

「待ってよ、月なんて……もつと凄い冒険をした私達だって、いくらでもあるじゃない」
 「そうね。でも、そんなあなた達の中に月に行った秘封倶楽部はいるかしら？」

そう。私達だって、月を通り越してトリフネ遺跡の探索という大冒険を経験している。

他にもケープカナベラルへの旅行で月からやってきた兎に遭遇したり、洛北に墜落した隕石を追いかけて宇宙飛行士の石を見つけたり、意志を持った月面探査車と交信したりという経験もあった。中には、火星や木星、銀河の果てに取り残された経験があるメリーウや蓮子βまでいた。火星基地にひとりぼっちで取り残された蓮子βは、その後NASAと協力し七年もかけて地球に帰還するという大々冒険をしたという。すごいぞ流石だ私。

けれど。その誰もが、月には辿り着けていないのだ。

相棒を失った私達もいたし、取り返しのつかない大怪我を負った私達もいた。喧嘩別れした私達もいたし、些細なすれ違いから、お互いを憎むようになった私達までいた。

勿論、幸せな人生を歩んだ私達もいた。あらゆる可能性が集まっていたからこそ、逆に浮き彫りになった——月という可能性。

万有引力に引かれて、禁断の果実は地に落ちる。

それを唯一口にした秘封倶楽部が、彼女達——秘封倶楽部βだった。

月に行った、それ以外はごくごく平凡な、私達に良く似た活動をしているだけの、蓮子βとメリーβ。

「それって、私達が原因だったってことかしら？」

「うーん。もしかしたら、原因って言うよりも理由なのかもしれないけど」

「理由？」

「月に辿り着いた秘封倶楽部を、選抜するための試みだったのかもしれない」

蓮子＼の補足が入る。

それは例えば、何十回と続けてサイコロを振って、全て連続して6の目が出るような可能性。限りなくゼロに近いけれど、無限回の試行があれば決してあり得ない話ではない可能性だ。

「大きく旧きものは、サイコロ遊びなどなさらない”。んじゃないの？”

「ええ。ただ無限の可能性と、試行とその結果があるのよ。ゼロに近いけど、ゼロではない可能性を探し続けたその結果。それがこのオールドアダムなんだわ」

気の遠くなるような繰り返し試行の果てに、神様の求めていた結果が発生したら。それ以上を無理して続ける必要はないわけだ。

「バー・オールドアダムの私達っていうこの状況も、もしかしたら最初の1回目でサイコロが6を出した状態を選抜しただけの事なのかもね」

あるいは。他の無数の可能性の世界の中では、蓮台野で無数の自分達と遭遇する私達や、いつまで経っても西東京に着かないヒロシゲに閉じ込められて議論する私達がいたのだろう。

「……つまり、私達は外れクジってことかしら？」

蓮子 θ を筆頭に、残念そうに声を上げる私達。けれど、その隣では別のメリーが、
「あら。これからも未来永劫、行けないなんて理由はないわ。あなたがいるのは、私達より未来かもしれないけれど、あなたの世界は私達の未来じゃないわ。私達は、自分達の明日のことを知らないんだもの」

夢を現実に変えるのよ。そんな頼もしい相棒の言葉に、百万の私達は頷く。

私達が知っているのは、今日までの私達だ。

「案外、明日には月に行けるようになるのかもね」

そう言って笑いあう間にも、いつしか不思議なオールドアダムの光景は薄れ始めていた。ぼんやりと霧が霞むように視界が遠くなり、すぐ隣にいた筈の私達が薄れ、見えなくなっていく。

「じゃあね、私」

「ばいばい」

はぐれないように、そっと、メリーと手を繋ぎ。

別れの挨拶をする先で。たくさんの秘封倶楽部が、揃って手を振っていた。

▼ 2017/10/28 21:15 先斗町通三条下ル無花果町 バー・オールドアダム

気付けば喧騒が戻ってきていた。カウンターの奥でグラスを磨くマスター、顔を突き合わせ
て論じるおじさん達、古い英字新聞を眺める老紳士、次のオカルト探検を計画する男女グルー
プ。それぞれが思い思いに、不健康な旧型酒を酌み交わし、性質の悪い酔いに身を委ねる
雑多で、古くて、どこか薄汚れた、いつものオールドアダムの風景だった。

テーブルの上には空になったフォビドゥンサイダーの瓶が1ダース。

「……あえ」

気付けば呂律も怪しく、視界がぐらぐらと揺れる。いつの間にこんなに飲んだのだろうと思
考を巡らせるが、禁忌の旧型アルコールは大脳皮質の隅々まで浸透して、人類の理性はあえな
くその前に敗北を喫する。

「……………」

すぐ目の前では、テーブルに突っ伏してすやすやと寝息を立てるメリーさん。そのやわらか
そうなほっぺに指を触れさせると、むにや、と眠たげに顔を上げる。

「？ なに、蓮子……」

「メリー？」

がばとテーブルの上に身を乗り出し、メリーと睨が触れそうな距離まで顔を近づけて。

念入りに、慎重に、酔いの回った頭でじいっとその顔を覗きこんだ。上から下まで、何度も何度も、じっくり繰り返し。数十秒。

なぜだか（アルコールのせいかな）真っ赤になっている彼女が、どこからどう見ても、私の良く知るメリーであることを確認して、一安心。

そっと額の汗を拭う。

「……よかった。ちゃんとメリーだ」

「なにがよっ」

失礼ね、と怒るメリーに。あははと笑って。

私は新しく注文したフオビドウンサイダーを開け、メリーの手握らせたもう一本にカキンと触れさせる。冷えた炭酸がしゅわしゅわと弾け、知恵の実の夢はまどろむ酔いの泡の中に消えていった。

【奥付】

「オールドアダムパラドックスβ」

平成二十八年十月三十日 科学世紀のカフェテラス6

発行 折葉坂三番地 (<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅折葉

印刷所 八雲出版



※本作は「上海アリス幻樂団」様の「東方Project」の二次創作です。
作中に登場するいかなる人物、組織も実在のものとは関係ありません。